

平成30年度 共同機構研修会

平成31年1月30日(水)

京都市教育委員会・子ども若者はぐくみ局 保幼小合同研修会

☆トークセッション 「スタートカリキュラムの実践に向けて」

 発表者 京都市立朱雀第三小学校 校長 小林 一弘
 京都市立朱雀第三小学校 教諭 後藤 旭洋
 京都市教育委員会 首席指導主事 松下 誠太郎

☆実践研究発表 「就学前施設と小学校とのよりよい連携に向けて」

京都市立翔鸞幼稚園 園長 古森 義和

京都市教育委員会・子ども若者はぐくみ局と保幼小合同研修会を京都市総合教育センター永松ホールにて開催しました。当日は、220人を超える参加者がありました。就学前施設と小学校との連携における工夫や課題等から、より良い連携の在り方について考え合える機会となりました。

トークセッションでは、

保育園(所)・幼稚園・認定こども園と小学校の現場の声から、学校全体で『学びのつながり』を意識することから始めようと

- 安心して自ら学びを広げる「学習環境」を整える。
- 生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図る。
- 子どもの発達を踏まえ、時間割や学習活動を工夫する。

スタートカリキュラムの基本的な考え方や具体的な取組についてお話をいただきました。

今後は、

- スタートカリキュラムの継続・改善や、児童が通う多くの就学前施設との顔が見える関係づくりに努め、連携を図っていきたい。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を、子どもの姿や教育実践の語りの視点としたい。とお話をいただきました。

実践研究発表では、

- 小学校長時代に、就学前施設と取り組んできたこと
- 幼稚園長として大事にしていること
- 幼児期と小学校期(低学年)とのつながりについて
- 日常の生活や活動の中で見られる「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について

子どもたちの姿から具体的にお話をいただきました。

就学前施設と小学校の双方が、お互いの顔が見え、双方の取組が分かる手だてを考えていきたいと結んでいただきました。



スタートカリキュラムの内容が聞けて安心しました。子ども、保護者にとっても安心です。子どもの育ちをつなぐために保幼に歩み寄っていただいていること、子どもたちを大事にいただいていることがよく分かりました。



参加者の声より

保幼小がそれぞれ顔を合わせて話し合うこと、子どもたちの姿、取り組んできたものを共有してつなげていくことの大切さを学びました。私たちも、小学校からのアプローチを待つだけではなく積極的に進めていきたいです。

子ども一人ひとりとしっかりと向き合い、信頼関係を築いていくことは素晴らしいことだと思う。就学前施設がどのようなねらいを持ち保育をされているのかがよく分かりました。小学校においても計画的に取り入れていきたいです。



小学校と園との違いをどうすればよいかと悩んでいました。時間割や掲示の工夫など、子どもが自然となじめるような手立てが必要であることを学びました。

共同機構研修 夜間講座を開催しました！

研修テーマは「発達」ということで、毎日の保育での子どもの理解や対応の参考になる研修でした。今回は2名の講師に講義をお願いし、発達障害の理解についてと発達障害をもつ子どもの保護者への支援について学びました。夜間講座ということで一日の仕事が終わった後のお疲れが残る時間ではありましたが、237名という多くの方がご参加くださり共に学ぶことができました。

平成30年度 共同機構研修会 夜間講座

平成30年11月16日(金)

子どもの分かりたいに応えよう！(発達障害の理解)～親の思いに寄り添って～

発達障害の基本理解

講師 萬木はるか 京都市発達障害者支援センターかがやき 臨床発達心理士



子どもの分かりたいに答えるときには、発達障害についての知識が役立つ場合があります。心の動きに任せて怒ったり叱ったり罰を与えたりするのではなく、きちんと子どもに向き合い、行動の理由や起こった状況を分析し、理由にフォーカスを当て対応することがとても大切です。

子どもが示す行動は、子どもたちからの「困っているよ」「助けて」のメッセージです。メッセージの理由を闇雲に探るのではなく、発達障害についての知識を使って考えてみてください。世の中には、このようなものの捉え方や感覚の特徴を持った人たちがいることを知ることによって、その行動の理由の予測を立てる幅が広がり、答えに近づく道筋が増えるのです。

発達障害の考え方は、以前は元々持っている特徴から病気や障害を捉える“医学モデル”が中心でしたが、どういう社会に身を置いて、どういう支援やアイデアを活用するかで特徴の現れ方は変わり、必ずしも困る状態になるわけではありません。その人が元々持っている特徴がその人にとっての障害となる状態は、社会との相互作用で起こるといえる考え方を“社会モデル”と言います。今、この考え方が浸透しつつあります。

発達障害の人の支援は、まずその人を知って理解を深めながら、強みを見つけることがファーストステップになります。次に特性に合わせた活動を選び、その人に合ったやり方を選んでいくと上手くいくチャンスが増え、周囲に認めてもらえることにつながりやすくなります。保育の中でも、先生に褒められたり友達に認められたりして、クラスの中で活躍できる場を作ることとはとても大事な視点ではないでしょうか。

診断が確定していなくても、それぞれの子どもの得意なところや苦手なところや困っているところなどを把握できていれば、支援は十分可能です。医学的な診断を受けることは、その子についての理解を周りと共に共有して深めたり、手立てを広げたりするためのサポートにはなりません。しかし、支援するためには、診断を受けることではなく、特徴を把握することが鍵になります。一人として持っている特性が同じ子どもはいません。一人ひとりに合わせてこの子がどうすれば分かりやすいか、どうすれば過ごしやすいかということに目を向けてください。子どもには、一人ひとりが分かったか、納得しているか、安心しているかを見守ってもらいながら育つことが必要です。そういった環境が用意してあげられれば、コミュニケーションや想像力の苦手さがある子どもにも、私たちの思いは必ず伝わります。



講義の詳細は、要録ページをご覧ください。 [要録ページへ](#)



夜間講座
研修の様子

子どもの分りたいに答えよう！(発達障害の理解)～親の思いに寄り添って～ 保護者のサポートを考える

講師 岡崎達也 京都市児童福祉センター発達相談所 言語聴覚士



保護者は、社会の価値観が多様化し自分の子育てが我が子に合っているか自信が持ちにくい状況に置かれています。家庭の中の子どもは非合理的な存在で、わがままや癪癪を起し保護者自身もネガティブになります。また、少子化や保護者の高学歴化で子どもに過大な期待をかけ、期待通りにいかないとストレスがかかったり、一方で、子どもと向き合わず、しつけや生活習慣を身につけさせることに関心が持てなかったりします。さまざまな発達特性のある子どもたちを育てるには“コツ”が要ります。私たちは子どもの発達特性に合わせた子育ての“コツ”を、子ども一人ひとりに合わせて考えることが必要です。子どもを理解するための基本は、子どもが持っている発達の特性を分かろうとすることが出発点です。決して診断や検査を実施することではなく、この考え方は特性のない子どもにも活かすことができます。

保護者は、誰でも子どもに課題があるとは言われたくありません。そして、専門機関に行く精神的な準備ができていないのに検査や診断を受けることは大きな決断です。医学モデルではなく、社会モデルで親子を地域でしっかりと支え、保護者が感じている不安感や実際の毎日の子育ての困難に寄り添いながら支援をしてください。

地域では、いろいろな方が協力しながら、保護者が気軽に相談できる支援の場を作っています。そこでは、保護者に子育ての困りを聞いてアドバイスすることから子どもの特性に気づいてもらうことがねらいです。また同じような悩みを持つ保護者同士が知り合うことも大変メリットがあります。

また、園での様子を保護者に伝えるときは、実際に起きている現象を正確に伝えるようにしてください。そして、発達障害だから、自閉症だからと話を始めず、保護者の心情や状況を踏まえて園が子どもに対してどのような工夫をしているのかを話していくことで、保護者との信頼関係が作られると思います。子育て支援は、保護者の気持ちに寄り添い悩みに共感しながら一緒に考えることで保護者の信頼を得ていくことができます。そして、子育ては地域の中でみんなが支えていくものです。発達障害があってもなくても、観点は一緒です。是非、みなさんも保護者と一緒に子育ての“コツ”を考えていただけたらと思います。



講義の詳細は、要録ページをご覧ください。 [要録ページへ](#)

この要約の内容を、いろいろな方法でもっと深く学べます！

講義録を読んで学ぶ

DVDをみて学ぶ

共同機構研修会の講義内容の講義録やDVDについては、
こどもみらい館ホームページからご覧ください。

園(所)の体制上、興味のあるテーマであっても共同機構研修会は勤務時間内に実施しており、誰でも参加できるとは限りません。参加したかった方はもちろん、こどもみらい館では、毎日の保育で、困ったな、どうしようと悩んでいる方に向けても、平成23年度共同機構研修会から、講義でお話された内容を講義録にしてホームページに掲載しています。また、講義を録画しDVDでも貸出をしています。ご覧になりたい方は、是非、一度こどもみらい館のホームページ、研修・研究をご覧ください。

第5期研究プロジェクトについて

◆任期

平成31年度から2年間

◆2本の研究プロジェクトを1本に

第4期までは、「子どもの心の育ちの連続性研究プロジェクト」と「子育て支援研究プロジェクト」において、それぞれに研究を進めていました。子どもの心の育ちと保幼小連携・接続，子育て支援の視点で取り組む中，それぞれが絡みあい切り離せないことを実感しました。第5期では1つの研究プロジェクトとして，子どもの心の育ちについてだけでなく，心を育む周りの大人である保育者や教師，保護者の心についても一緒に語り合います。

◆心の育ちの共有

第4期報告会において鯨岡先生，大倉先生の両研究アドバイザーから，就学前施設と小学校における心の育ちの捉えについて更に深めていくことが期待されると示唆いただきました。

第5期研究プロジェクトでは，「心の育ちの共有」をテーマに，乳児期から小学校までの子どもの心の育ちがどのように変化していくのかについて具体的な事例から見取り，子どもの心の育ちの連続性について探ります。就学前施設の先生方や小学校の先生方でさまざまに語り合いながら，「**私たちが大切にしたい心の育ちとは何か**」を研究します。



◆どこから迫り，どこへ向かうか

市内にたくさんある就学前施設においても小学校においても，また，個人やその施設の子どもの心の育ちについての考え方はさまざまですが，研究プロジェクトの場で語り合いながら共に子どもの心の育ちを大切にしたい保育・教育について研究していきたいと思えます。就学前施設では幼児期の終わりまでに育てたい10の姿をどのように読み取っているのでしょうか。第5期研究プロジェクトでは，心の育ちに焦点をあて10の姿についても考察します。その視点を大切にしたい保幼小連携や接続，要録や引き継ぎについても触れていきたいと思えます。そして，子どもの心の育ちに大きくかかわる保護者との関係性や子育て支援について考察も重ね合わせていきます。子どもとの素敵なやり取りや子どもの姿の変化から感じることを皆さんと一緒に語り合しましょう。



冊子をご活用ください！



第4期研究プロジェクトでは研究成果として右記のような冊子を作成しました。各園(所)に配布させていただきましたので，ご一読いただき，職場研修などでご活用ください。また，4月にはみらい館HPIにデータとしてもアップさせていただきますのでそちらもご覧ください。

保幼小連携・接続
ちょこっとハンドブック

こんなとき
あなたなら
どう寄り添いますか
気持ちに寄り添う子育て支援

<子どもの心の育ちの連続性研究プロジェクト> <子育て支援研究プロジェクト>

子どもを育む喜びを感じ，親も育ち学べる取組を進めます。
[京都市はぐくみ憲章]より



この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！



発行日 平成31年3月20日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町601-1
Tel (075)254-5001 Fax (075)212-9909
URL <https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/>
* HPのアドレスが変わりました。